

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生5・6年の部 優秀賞

## 母への思い

千代野小学校六年

越村 こしむら

美優 みゆ

母は、私が笑っている時は、一緒にずっと笑ってくれます。泣いている時は、涙を拭えるようなきよりにいて、私をはげましてくれます。これは、自分達のきより、私と母の心のきよりが近いからこそ、気持ちが通じ合っている、そう思いました。

私は、一年生の頃から、ピアノを習っています。最初は、ピアノを弾く事が楽しくて、毎日、何時間も弾いていました。しかし、四年生の頃、その気持ちはゼロに近づいていました。選んだ曲が難しすぎて、中々進めないのです。母も、アドバイスとして、

「もっと練習して、ダメな所見つけんなんよ。じゃないと、弾ききれんよ。」

と声をかけてくれました。それが私には、アドバイスの声かけには聞こえませんでした。

「お母さん、ピアノも弾けんし、この曲の難しさも分からんのに言わんとして！」と正直思いました。でも、言えませんでした。そして、毎日の夜練習でも、

「学校から帰ってから弾いたし。」

と言って、弾かなかった日もありました。でも次の日に母のチェックが入って、

「手抜いとったやろ。あと一ヶ月しか無いんやよ！ どうするん！」

と母とは思えない強い口調で怒られました。

ついに、私はがまん出来なくなつて、

「もう辞めたい。難しすぎる。」

と言って部屋のドアをバンツと閉めました。閉める時にすきまから見えた、悲しそうな母。そーっと開けてみると、母は、

「辞めたいなら辞めればいいよ。」

と一言残して部屋を出ました。心の中で、

『言わなきゃよかったかな。ごめん。』

と謝りました。

その日から、いつもの倍の練習量でピアノを弾きました。母も、  
「頑張つとるじー！」

といつて、ほめてくれました。その時、昔の楽しさを思い出し、ピアノを弾くのが楽しくなりました。そして、私は、あの時のアドバイスを思い出しました。『ダメな所を見つける』この言葉の意味が、やっと分かりました。ダメだったのは、音でもリズムでも強弱でもなく、曲をあきらめて、手を抜いた事だったということ。

コンクール当日、父や祖母は、がんばれと応援してくれましたが、母は、他の参加者の曲のプログラムを見て、

「この曲知つとる？」

と言って、私が歌つて、母が、リズムにのつて首をかたむけました。最初は、

「もう本番なのに何させてんの。」

と思つていましたが、だんだん気持ちが落ち着いてきて、緊張も無くなりました。そして、私の出番が回ってきました。今までの練習と母の言葉を思い出しながら弾きました。自分的に、大成功の結果となりました。

お辞儀の時に母を見ると笑顔で拍手をしてくれていて、弾ききれたのは母のおかげだという事を実感しました。下を向いている間、小さな声で、

「お母さん、いつもありがとう。」

と言いました。その時、心がつながった気がしました。

「越村美優さん！」

私の名前が呼ばれました。状況が分からないままステージに上がりました。

「10名の方々、入選おめでとうございます。」

やっと状況が飲みこめました。母は、おくつというように口を開けて、また笑顔で拍手をしてくれました。本当は入賞の方が良かったけれど、入選として、賞をもらえて、とてもうれしかったです。

審査員の方から賞状をもらえて、やっと実感がわいてきました。最初

は、練習するのも嫌で、手を抜いて、怒られ、ピアノを辞めたいとも言つて、母にも迷わくをかけて……。ここから私は、この曲には母が関係していて、入選出来たのも母のおかげだと、改めて思いました。この後、母は、肩を持って、こう言いました。

「良かったじ〜！ 本当は入賞が良かったけど。まあ、頑張った！」

実は、入賞になると名古屋の中部大会に行けるので、その前の年のコンクール後に、

「名古屋連れてってや〜！」

「どこ行きたいん？」

「きつ茶店でモーニング食べたい！」

「それ石川でも出来るやろ（笑）」

という会話をしたのを覚えています。なので、次のコンクールでは絶対に入賞を取って、母の夢？のモーニングを食べたいと思いました。

一度けんかしても、心のきよりを近づける事で、すぐ仲直りできます。心のきよりは、私は、相手を思いやったり、いつも近くですぐすと近くなると思えます。私は笑顔の母や楽しそうな母を見ると、楽しく、笑顔になるので、気持ちを通じ合い、心がつながった親子だと実感しました。ずっと優しく、時には厳しい、最高の母でいてほしいと思いました。

